

甲状腺外科草子 132

哲人宰相：大平正芳余話⑤

杉野 圭三

閣僚就任

池田勇人が宏池会を結成したのは1957年（昭和32）、代議士5年目の大平は当然加入した。1960年（昭和35）7月19日、第1次池田内閣が誕生した時、大平は内閣官房長官に就任。8年目の新人代議士が内閣の最重要ポストである官房長官に就任するのは異例の事であり、池田の信任の深さが良く分かる。



官房長官就任記者会見



第一次池田内閣（最後列左）

池田内閣は「寛容と忍耐」の政治姿勢をアピールし、大平官房長官は「鈍重ながら忠実なコッテ牛」と評され、第2次池田内閣でも官房長官を務めた。



カレーを食べる池田と大平



宴会芸？

酒豪の池田と対照的に下戸の大平は料亭でも焼き芋を食べ、その人柄は料亭の女将から「オトウチャン」と呼ばれ信頼されていた。

大平は池田に「国民と苦楽を共にして頂かなければいけませんから芸者のはべる宴席とゴルフはできることならばご遠慮願いたい」と言っている。

1962年（昭和37）第2次池田改造内閣で念願の外務大臣に就任、日韓関係改善などに取り組んだ。



昭和37年7月香川県豊浜町お国入り

同年10月、朴正熙大統領側近の大韓民国中央情報部（KCIA）長の金鍾泌と会談を行った。

日韓の請求権問題解決には大きな課題があり、韓国の要求は6億ドル、日本は3億ドル

を提示した。結局、無償3億ドル、有償2億ドル、民間借款1億ドルで合意した。

この合意内容はのちに「大平・金メモ」と呼ばれ、外遊から帰国した池田は総理抜きで行われた会談に不満があり、大平との仲がこじれる原因となった。



ライシャワー会談 ヒューム英外相（中央）

大平は外相就任後、欧米訪問の外遊にでた。1962年9月21日、国連総会で演説、米国ラスク國務長官と会談。ヨーロッパでは、約10日間で英国グリーン國務相、仏ドゴール大統領、独シュレーダー外相、伊セーニ大統領、ヨハネ23世、ベルギー、オランダを訪問した。

大平の外交機軸はアメリカであり、大磯に引退した元首相吉田茂を頻回に訪問している。手土産の果実を持参すると、吉田は「いや、ゲンナマでも別に苦しくないよ」とジョークで歓迎した。大平は吉田の話を楽しみにしていたが、会話の中で吉田の年を1歳上に間違え怒られた。大平は「総理は私の応援演説をした時、最初から最後までオオダイラ君と連呼されました、これであいごでいかがでしょうか」と返した、吉田は「それは失礼した」と大笑いしたとのこと。

2000年8月30日、朝日新聞は1963年4月4日の核密約に関するライシャワー・大平会談を次のように報道している。

「私（ライシャワー）は米国がイントロデュース（持ち込み）という言葉に固執している意味をはっきり説明し、それは日本領土上に配置したり設置したりすることを意味すると説明した。（中略）大平氏の反応は素晴らしかった。彼は米国がイントロデュースという言葉であらわそうとした意味を、自分が（そして多分池田首相も）理解していなかったことを認めた。しかし、それが明らかになったことにショックを受けていることは見せなかった」
会談後、大平は悩み迷ったといわれる。

1964年にライシャワー氏が暴漢に襲われた時、大平は病院に駆けつけ手術が終わるまでの3時間、ライシャワー氏の妻にずっと付き添い夫妻から深く感謝された。

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年4月3日